

2013年度 オムニバス講義（ユニット1担当）「アジアの仏教と文化（第1回）」

- 報告題目：ブータン仏教と GNH（国民総幸福）
- 開催日時：2013 年 4 月 25 日（木）10:45～12:15
- 場所：龍谷大学深草学舎 2 号館 201 教室
- 報告者：熊谷誠慈（京都大学こころの未来研究センター准教授）
- コメンテーター：三谷真澄（龍谷大学国際文化学部教授）
- 参加者：

【報告のポイント】

本発表においては、チベット仏教史の流れに沿って、ブータンという国における仏教の特性を概観した。その上で、同国が掲げる GNH（Gross National Happiness, 国民総幸福）という政策と、その背後に存在する仏教思想との関係について、さらには、他の幸福度指標との関連の中で、GNH 政策のもつ意義とその効果について考察をおこなった。

【報告の概要】

2011 年 11 月のブータン国王ご来日以降、わが国では急速にブータン熱が高まった。とりわけ、同国は GNH 政策を標榜する「幸福大国」として大きな注目を集めている。しかしながら、GNH を含めた諸政策について、仏教思想的な視点から語られることはあまり多くない。そこで、本発表では、ブータンの歴史や思想、宗教等を概観した上で、GNH の意義、思想的背景、さらにその効果についての検証をおこなった。

ブータンには 8 世紀頃よりチベットから仏教が少しずつ伝来したと考えられている。元来、ブータンはチベット文化圏の 1 地域であったが、17 世紀半ばにチベット仏教ドゥク派のシャブドゥン・ガワン・ナムゲル（1594-1651）によって統一され、一独立国家となって以降、ドゥク派が政権を担ってきた。1907 年にはワンチュク王朝による世俗政権が誕生したが、その後も国王は仏教に帰依をし、同国には仏教文化が変わらず強く根付いてきた。

ブータン人たちは、仏教の輪廻思想に基づくことで様々な価値観を生み出している。まず、人間のみならず全ての動植物を家族と見做すことで、全ての個的存在の平等性を認めている。さらに、輪廻における苦からの脱却たる涅槃を「究極的幸福」と見做し、富や地位、名声などはあくまで刹那的・快楽的な「世俗的幸福」と見做すことで、二種の幸福感を保持している。なお、GNH の Happiness とは、あくまで世俗的幸福に含まれる。

GNH には 4 つの柱（公正な社会経済発展、環境保全、文化保存、良い統治）および 9 つの領域（教育、生活水準、健康、心理的幸福、コミュニティの活力、文化的多様性・弾力性、時間の使い方、良い統治、環境的多様性・弾力性）が存在する。この 9 領域はさらに 33 の尺度に分割され、この尺度を点数化することで国の幸福の状態を把握し、政策に反映している。なお、この 9 領域および 33 尺度の多くは、それぞれ幸福に寄与するものである

ことが科学的な実験・調査等によってすでに証明されている。しかし、上述の如く GNH 政策とはあくまで、世俗的な幸福政策であり、ブータン人たちにとっての究極的な目標ではない。彼らにとっては、涅槃こそが究極的な幸福目標なのである。

【議論の概要】

三谷氏からの三つの質問に対して、報告者から回答があった。

1) 【質問】熊谷先生のブータンにおいてフィールドワークをされる地域はどこでしょうか？【回答】現在は、西ブータンのティンプ県やワンデュ県、さらに中央ブータンのブムタン県を中心にフィールド研究を行っています。

2) 【質問】発表の中で、種々の「幸福度」を表す指標を提示していただきましたが、その内容や意味、国際的な信頼度はどのようなもののでしょうか？【回答】例えば、国連の Human Development Index は大よそ開発的側面に焦点を当てており、NEF の Happy Planet Index は環境も含めた幸福度指標となっていますが、視点は違えど、国際的にも良く参照されるという意味では信頼度が高いといえるでしょう。

3) 【質問】2011 年 2 月 14 日に、「KYOTO 地球環境の殿堂」に選ばれた第四代国王の名代として来日されたケサン王女が龍大で講演されました。その後のトークセッションにおいて、側近の方々が「中道」という仏教の概念を明示して、ブータン王国の GNH 政策を説明しておられましたが、それはブータン国の法律で規定されているのでしょうか？【回答】GNH に関する憲法の条文中には、「中道」という仏教哲学用語は用いられていませんが、経済などの 1 点に偏らないようバランスを取っている点については、ケサン王女の側近の方々も仰っていたように「中道」の思想が反映されていると思われます。



2013年度 オムニバス講義（ユニット1担当）「アジアの仏教と文化（第2回）」

- 報告題目：「一神教」になった仏教：インドネシアにおけるパンチャシラ体制と仏教復興
- 開催日時：2013 年 5 月 9 日（木）10:45～12:15
- 場所：龍谷大学深草学舎 2 号館 201 教室
- 報告者：木村敏明（東北大学大学院文学研究科准教授）
- コメンテーター：桂 紹隆（龍谷大学文学部教授，BARC センター長）
- 参加者：200 人

【報告のポイント】

インドネシアの歴史と文化を踏まえながら、国家にとっての、また国民一人一人にとっての宗教が検討され、その上で、インドネシアにおいて決して多数派ではない仏教がどのようにして生き残ってきたかが説明された。そして、インドネシア独自の仏乗仏教が紹介された。

【報告の概要】

人生において宗教は重要か？という質問に対して、実に 97.7%の人が非常に重要であると答える現代のインドネシア国民の多く（86.9%）はイスラーム教徒である。しかし、その国の歴史を振り返ると、スマトラ島南部にシュリーヴィジャヤ朝（7c-13c）、ジャワ島にボロブドゥール遺跡で有名なシャイレンドラ朝（8c-9c）があり、仏教・ヒンドゥー教が栄えていたことがわかる。その後植民地時代を経て、戦後、スカルノ大統領（1945-67）は宗教改革によりインドネシアをイスラーム国家とするのではなく宗教国家とし、続いてスハルト大統領（1968-98）がパンチャシラ（建国五原則）を掲げた。その第一の項目が「唯一最高神への信仰」である。これは反共政策と結びついて絶対視されたものであるが、現在の公認宗教制度としても、インドネシア国民はイスラーム・カトリック・プロテスタント・仏教・ヒンドゥー教・儒教の六つの宗教のいずれかを選択しなければならず、無宗教は認められていない。そのため、婚姻に関しては厳しく、異なる宗教同士では結婚できないなどの問題がある。

インドネシアにおいて、20 世紀以降の仏教復興に大きく貢献した人物がアシン・ジナラツキタ（戴満安）である。彼はオランダ留学後、1953 年にジャカルタの臨済宗の寺で出家し、翌年ビルマで具足戒を受け上座部仏教の比丘となるなど、異色の経歴を持つ人物である。彼は、インドネシアにおいて人口の 1%（約 200 万人）しかおらず肩身の狭い思いをしている仏教徒のために僧伽を設立し、仏教を「唯一最高神への信仰」という制度に見合う「一神教」とするために、「仏乗仏教」を提唱した。「仏乗（Buddhayana）」とは、上座（Hinayana）・大乘（Mahayana）・金剛乗（Vajrayana）を包括するもので、様々な仏・菩薩は超越的な「本祖仏（Adi-Buddha）」の化身であるとし、これに帰依することで形式的には「一神教」の装いをなしているのである。

【議論の概要】

桂氏は、建国五原則の原語パンチャシラが、言語的に仏教の五戒（pañcasīla）に相当し、また、インドネシア語で宗教を意味するアーガマ、名前を意味するナーマがいずれもサンスクリット語に遡れることを指摘した。このことに関して報告者からは、インドネシア語において抽象的な概念を表す語の多くに、サンスクリット語の影響が見られることが述べられた。またフロ



アーから、六宗教のうち儒教においての「唯一最高神」とは何か、との質問がなされ、報告者からは、儒教は近年新たに加えられた公認宗教であり、いまだはっきりと定義されていないのが現状であるとの解答がなされた。



2013年度 オムニバス講義（ユニット1担当）「アジアの仏教と文化（第3回）」

- 報告題目：大谷探検隊：仏教文化の源流を辿った若者たち
- 開催日時：2013 年 5 月 23 日（木）10:45～12:15
- 場所：龍谷大学深草学舎 2 号館 201 教室
- 報告者：岩田朋子（龍谷大学龍谷ミュージアム講師（学芸員））
- コメンテーター：桂 紹隆（龍谷大学文学部教授，BARC センター長）
- 参加者：202 人

【報告のポイント】

平均年齢が 20 代後半の大谷探検隊によってもたらされた資料の数々が映像で紹介され、彼らの目的とその成果が説明された。

【報告の概要】

大谷光瑞（1876-1948）が中心となり 3 度にわたる古代仏教遺跡の調査を行った大谷探検隊の主たる目的として、(1) 仏教の源流の探索，(2) 仏教の広がり認知，(3) 仏教の伝わった範囲の確認という 3 つが紹介された。実際にその目的に沿って、(1) 中央アジアから東南アジアにかけての調査が行われ、(2) 言語を問わず文献資料の収集が実施され、(3) 世界中に隊員が派遣された。

大谷探検隊の調査成果として、舍利八分で有名なドローナの壁画や、ミーラン出土の有翼天使像壁画、クチャ出土の舍利容器などが紹介され、かつての西域地域では仏教以外にも多くの宗教や思想が共存していたことが示された。

また、探検隊が招来した資料の中には、ウイグル語で書かれたイソップの伝記など、仏教以外の宗教文献もあり、13 種類の文字、15 種類の言語が確認されていることや、他にも橘瑞超（1890-1968）がローランで李柏文書を発見するに至ったエピソード、貨幣換算早見表などの大谷探検隊の必須の調査道具が紹介された。

スウェン・ヘディン（1865-1942）やポール・ペリオ（1878-1945）などの調査のように、欧州の列強が国家レベルで探検隊を派遣していたのに対して、大谷探検隊が西本願寺の取り組みとして仏教伝播の歴史を求めて調査を行ったという点は、歴史上特筆すべきであり、彼らによってもたらされた貴重な資料のうち、一部が龍谷大学で保存・管理され長きにわたり研究がなされてきた。龍谷ミュージアムでは、これまでの研究成果を踏まえ、展示内

容に合わせながら大谷探検隊の将来資料を公開していく予定である。

【議論の概要】

桂氏からは、多岐にわたる大谷探検隊の業績が手際よく紹介され、また、龍谷ミュージアムにおいて展示されているものの価値が良く理解できる報告であったとのコメントがなされた。



2013年度 オムニバス講義（ユニット1担当）「アジアの仏教と文化（第4回）」

- 報告題目：仏教僧たちはどこに住んでいたのか？
- 開催日時：2013年6月6日（木）10:45～12:15
- 場所：龍谷大学深草学舎2号館201教室
- 報告者：岩田朋子（龍谷大学龍谷ミュージアム講師（学芸員））
- コメンテーター：井上綾瀬（龍谷大学仏教文化研究所客員研究員）
- 参加者：193人

【報告のポイント】

仏教の出家修行者（僧）たちが住むところを、今日の日本では一般に「寺」と呼ぶが、報告では、初期仏教において、僧が修行し、住まう場所として相応しいのはどのような環境とされたのか、僧院とはどのような場所であったのかが示された。

【報告の概要】

現在、アジアにはインドのアジャンターのような石窟寺院から日本の法隆寺のような形式の伽藍に至るまで、様々なタイプの寺院が存在する。しかし、初期のインド仏教において仏教僧たちはどこに住んでいたのだろうか？

仏教僧が住むべき場所については、『スッタニパータ』や『ダンマパダ』などの最初期の

経典にすでに説かれており、一般人が寄りつかない厳しい自然環境の中、修行に集中できる場所であることが望ましいとされた。これは、必要に応じてある場所に一時的に滞在しながら修行場所を移動していく「遊行生活」と言える。

一方、律文献においては、「仏教僧は樹下坐（修行生活に適した自然環境）に依るべきであり、命が尽きるまで修行に努めるべきである」という生活原則が示されつつ、布施があった場合には、樹下坐に準ずるものとして精舎（ヴィハーラ）などの建物が認められている。このような修行生活場所の布施としては、ビンピサーラ王や給孤独長者の事例がよく知られている。

報告では、特に給孤独長者による祇園精舎の布施物語の一場面が取り上げられ、仏伝浮彫「祇園精舎」や祇園精舎址の画像とともに詳しく説明がなされた。また、他の石窟寺院の内部構造や僧院址、アジャンターの開窟途中の石窟なども紹介された。これらの遺跡群は、「長期的な滞在生活」あるいは「定住生活」をしていた仏教僧の存在を示している。

これらの修行生活を可能にした僧院施設によって、インドの激しい暑さ・寒さや獣・蛇などの危害を避けることは可能となったが、仏教僧にとってそれはあくまで樹下坐に準ずるものに過ぎない。しかし在家信者にとっては、仏教僧の長期的な滞在や定住が彼らとのつながりを密にするきっかけとなった。僧院は、仏教僧に対して在家信者が容易に食べ物や衣を布施することができる場となり、在家信者が容易に仏教僧から説法を聞くことができる場となった。

このようにして仏教僧は「遊行生活」と「定住生活」とを選択できるようになり、インドにおける仏教僧の生活は、僧院の布施によって大きく変化することになったのである。

【議論の概要】

フロアーからは、仏教僧の修行生活の原則である「四依（糞掃衣・乞食・樹下坐・陳棄薬）」について質問がなされ、報告者からは各項目について説明がなされた。四番目の薬に関しては、次回（2013/7/11）のオムニバス講義の内容とも重なるため、その担当者である井上氏がコメントとして簡単に説明した。



2013年度 オムニバス講義（ユニット1担当）「アジアの仏教と文化（第5回）」

- 報告題目：仏教僧たちは何を食べていたのか？
- 開催日時：2013年7月11日（木）10:45～12:15
- 場所：龍谷大学深草学舎2号館201教室
- 報告者：井上綾瀬（龍谷大学仏教文化研究所客員研究員）

■コメンテーター：間中 充（龍谷大学大学院，BARC スタッフ）

■参加者：201 人

【報告のポイント】

古代インドにおいて、仏教の出家修行者（比丘）たちがどのような規律の下で具体的に何を食べ、また、病気になった際には彼らにどのような薬が処方されていたのかが紹介された。

【報告の概要】

律文献に見られる比丘の食生活に関する基本姿勢は、調理された食料の乞食による入手と、正午以降は食事を摂らないという2点に要約される。乞食により料理を入手するという方法をとるため、比丘には献立の選択権はなく、一般の人と同じものを食べていた。ただし、十種肉（ヒト、ゾウ、ウマ、ヘビなど）などは、布施されても口にしてはならないとされた。また、古代インドの時代から既に、トウガラシやウコン、ショウガ、コショウなどのスパイスが存在しており、また黒砂糖（黒蜜に小麦粉などを入れて固めたもの）や塩（ヒマラヤの岩塩、塩田）があったことが確認されることから、現代インドと大きく違いのない食事を摂っていたことが想像される。

当時の食事風景は美術作品に描かれており、アジャンターの壁画にあるジャータカの場面や生死輪廻図、パールフットのウッタラクルの楽園の場面から、比丘の生活用品である「鉢」や当時のインドの厨房の様子、調理道具が示され、また、シルカップから出土しているワインカップなどの食器類も紹介された。

最後に、律に記されている食事に関する実に細々としたルールを提示し、比丘が基本の乞食の他にも「およばれ」で食事を済ませられるというルールや、病気の際には食事を寺院まで運んでももらえるという規則が存在することが示された。薬に関しては、比丘が健康を損ねた場合には、早く修行生活に戻る為に薬を在家者に要請できることが紹介された。迅速な修行への復帰の為に、栄養価の高いものも許されたようである。

【議論の概要】

間中氏より、律で肉食が禁止されていないにも関わらず、大乘仏教において菜食主義が定着したのはなぜかという質問がなされ、報告者は、6～8世紀頃にインドにおいて菜食主義がもてはやされた時期が訪れたことが要因の一つとして考えられるとの見解を示した。

